



原田文孝

はらだ ふみたか / 1956年岡山県生まれ。兵庫県加古川市で肢体不自由養護学校に31年勤める。教員退職後も障害福祉の職場で障害の重い人たちとかわり続ける。NPO法人ささゆり会代表

私に

人生と

言えるものが

あるなら



第8回 人生、一人じゃ生きていけない

52歳の大山さん

私は、担任してきた子どもたちを、大勢亡くしています。施設訪問学級に7年間いましたが、その間でも担任している子どもが2人亡くなりました。施設では、障害が重く、高齢の人たちが多かったので、7年間に何人も亡くなった人を見送ってきました。

52歳の大山さん(仮名)を担当したときに、大山さんたちは、友だちが亡くなっていくことをどう感じているのだろうか、人が亡くなることをどう考えているのだろうかと思いました。大山さんたちは、友だちが亡くなったことは知っていますが、職員さんは動揺させてはいけないと思っっているのか、何も伝えていませんでした。私は、大山さんたちは、友だちが亡くなったことをちゃんと知りたいたいと思っっているし、一緒に悲しみたいとも思っっているのではないかと考えました。私は、人が亡くなることを多く体験してきた大山さんに、人の死について考える授業が必要だと思いはじめました。

大山さんは、7歳で入所して45年間暮らしています。左手の随意性が高く、ゆっくりにかぶっている帽子を脱ぎます。発

音は不明瞭なところがありますが、よくしゃべりかけ、わざと反対のことを言ってみるを怒らせ、「天邪鬼」と言われていました。学校文化への憧れがあり、33年ぶりに訪問学級の高等部に入学してきたのです。

亡き人と出会う文化を

そんな大山さんと人の死についての学習を始めたいと思いましたが、どのような授業をつくっていったらいいのかかわからず、悩んでいました。そうした悩みを抱えながら生活していると、テレビやラジオ、新聞や本からいろいろなヒントが立ち上がってくるように感じることがあります。

ある夜、ラジオを聴いていると、評論家の若松英輔さんが死について語っていました。なにかヒントになりそうだと思っ、「君の悲しみが美しいから、僕は手紙を書いた」(2014)という本を読んできました。若松さんは「死者はしばしば自然を『言葉』として語ることがあるのを感じます。また、あるとき自然は、無言のうちに死者が近くにいることを教えてくれることがあります。リルケという詩人は、花を見るととき死者の存在

を感じ、果実には死者の思いを感じると書いています」「今では、お墓の意味も変わってきました。墓所は死者の居場所ではなく、生者と死者の待ち合わせ場所のような感じがします」と述べています。私はこれを読んで、「そうか、お墓は、亡くなった人と出会う場所なんだ、お墓は亡くなった人と出会う文化なんだ」と思っ、こうした亡くなった人と出会う文化を教材化して授業をつくらうと考えました。考えてみると、毎朝、仏壇に線香をあげているのは、亡くなった父と母に私は出会っっているのです。

授業の目標と題材

天邪鬼と言われている大山さんは、職員さんと結構もめていて、大山さん自身もしんどい思いをしていました。

大山さんのめざす姿として「他者とのかわりを通して自分を振り返り、内省的に生きる」という人間像を考えていたので、授業の目標は①亡くなった人と対話する文化を体験し、死ぬことを感じたり、知ったりする、②亡くなった人(目の前にいない人)のことを思っ(イメー

ジシ)、語りかけられる、としました。授業は、人間が生まれ、成長し、老い

て死んでいくという人生を伝えることから始めました。歌「大きな古時計」の1番で、「おじいさんが産まれた朝に買った大きな時計さ」を歌いながら、赤ちゃんの絵を見て、人が産まれてくることを確かめました。2番の「きれいな花嫁やってきた」で成長して結婚する絵を見て、3番の「天国へのぼるおじいさん」で亡くなって天国へ行く絵を見て、人が死んでいくことを伝えました。亡くなった人と対話する文化として、お経をよむ、お墓参り、遺影に花を供えるのを体験しようと考えました。また、お墓参りのDVDを視聴しながら「千の風になって」の歌を歌い、絵本『てんごくのおとうちゃん』を読み語ることにしました(実際、大山さんのお父さんは亡くなっっています)。

授業の様子

授業の様子を記録から紹介します。「畑で花を摘む。枯れている花は『いや』と言っきれいな花を選んだ。『大きな古時計』を歌うと、知っっている所は一緒に歌った。生まれる↓成長する↓死んで天国に行くという話をわかっっているようだった。私が『天国』と言って天井の方を